

2002年1月31日発行 (隔月刊)

Shinjuku
Ikebukuro

新宿 池袋
連絡会

NEWS VOL.27



∞∞∞∞今号のメニュー∞∞∞∞

特集・新宿、池袋越年闘争報告

- 2001-2002中央公園雑感 笠井和明
- 越年医療班活動報告 稲葉剛
- パトロール班報告 星将隆
- 越年闘争・炊き出し班報告 本田庄次
- 池袋の越年闘争も無事終了 遠田哲史

その他もろもろ

- 中央公園の悲劇
- 東村山で仲間の虐殺事件が発生
- 民主党鳩山党首が戸山公園を視察
- 活動報告 通常国会行動
- 「ホームレス自立支援法案」の議論の
仕方についてその2 笠井和明
- 大田寮のっけから混乱!
- 財政報告
- 越冬ボランティア募集

定価100円 (カンパ込み)

第8回新宿越年闘争IN中央公園



明日を求めて今日の飯
流れ着いたは港街
野宿なれども友がいる
義理と人情の港街

ラビサリの皆さん他の越年コンサート（12月29日）



2001-2002中央公園雑感

笠井和明

第8回目となる新宿越年闘争が12月29日から1月4日まで新宿中央公園で開催され、無事終了した。

越年闘争に先立ち、12月24日に四谷区民センターにて百名の仲間が集まり突入集会を行い、本越年越冬闘争の位置づけを確認すると同時に各班においても綿密

な打ち合わせを支援者と共に行った。

『確かに私達の主体力量は現状維持だけで手一杯ではある。けれども現状に振り回された事により、私達は数多くの悲劇を目の当たりにして来た。排除とのたたかいなら排除のたたかいだけに固執し、何でも排除反対に結びつける。対策要求なら対策要求だけに固執し、対策がすべてかのように結びつける。これらをもっと総合的な視点で考え、かつ未来という私達の戦略から導いていくような手法の運動が、現状に振り回され易い路上の運動だからこそ必要なのである。総合的な対策という用語を行政は使うようになったが、私達も総合的な運動でこれと対峙していかねばならぬという事である。東京都が対策の体系を編み出したように、私達も運動の体系を編み出していかねばならないのである。反対だけの運動、抗議だけの運動、コミュニティを確認するだけの運動という時代はとうに過ぎた。そこから先を私達は私達の現場の感性、仲間の利益から導き出し、それを行政にやらせる、もしくは自ら行なうなどの方向性をもたねばならない。未来にとことん責任を持つ運動主体でなければ、私達と仲間との信

特集・新宿、池袋越年越冬闘争



中央公園の昼はみんなで共同炊事、和気あいあい

頼関係など一夜のうちに崩壊するだろう』
(越年越冬闘争基調より～基調全文は

www.tokyohomeless.comに掲載)

一つの行動を口先だけでなく実際に遂行する事。越年闘争の一週間の取り組みは仲間との信頼を築き上げる上でも連絡会活動にとって重要な取り組みである。私たちはこの越年越冬闘争の中で幾多の試練を味わい、そして今も味わい続けている。『冬』は路上の極限の姿である以上、矛盾も希望も濃縮されて現れると言う事を私たちは運動の中で経験して来た。

越年闘争は今の時点で思えば1・19爆弾事件、1・25火災事故という中央公園史上最悪激動の一週間を予想するかのような静かな、そして蓄積のある越年であった。最後の西口地下広場越年であった98年の時も不気味な静けさであった。新宿という街は静けさが一番相応しくないのであろう。反動はいつも来る。

ある意味ではそういう反動の時が来るが故に、私たちの日常の活動、とりわけ仲間との信頼関係を日々作

りだしておかねばならない訳である。

年を重ねる毎に厚みが増してくるというのは新宿ならではの越年スタッフ体制である。これはどこにも見られない私たちの誇りとするものである。車両、本部など雑用的な仕事の中心となってくれた仲間は4号街路時代の仲間達。あの1・24を共にたたかった精鋭部隊の生き残りである。それぞれ自立した生活を今は送ってはいるが越年には必ず顔を出すという仲間達。西口インフォメ時代の苦闘を共にした仲間達はテント責任や炊き出し部隊の中心を担い、中央公園時代の仲間達は炊事や医療テントを率先して担う。越年はさながら連絡会の同窓会のようなものであり、それぞれの時代を生きて来た幾多の仲間達が実際に顔を合わせられる数少ない機会でもある。路上は寄せ場と違い、そこから離れると生活



山谷の玉三郎も新宿に登場！1月3日
さすらい姉妹路上劇

空間も生活環境もまったく別のところで暮らさざるを得ない。が、心ある仲間達はどこにしようとも年末年始新宿に来てくれ、それが当たり前かのように仕事をし、そしてまたそれぞれの住み処に帰って行く。そしてそういうベテラン勢に加えて、数日前



もちつき大会では笑顔と歓声（1月3日）



夕方の盛りつけ作業は仲間、支援者総動員



正月のお楽しみさすらい姉妹の路上劇に多くの仲間が

に野宿に至ったような仲間がふらりと来、ベテラン勢の真似をしながら手伝っていく内に連絡会の主要なメンバーへと育てて行く。そういう入れ替わり立ち替わりの『独さ』というものが、『継続こそ力なり』という言葉の意味を示しているのだろう。

越年闘争というのは外見上は毎日炊き出しを行い、企画を行い、パトロールも連夜行い、医療体制も24時間体制を取り、また年明けには集団福祉申請をするという、これだけを書けば日常活動を集中的に行っているだけの行動の連続なのであるが、そこには別の、連絡会が越年闘争を義務感やスケジュールでやってはいない特別な意義があるのである。港街たる新宿特性の『貧しい人々の出会いがおりなすシンフォニー』のようなものがあるのである。支援者もボランティアもそういう『協和する心地よさ』に引きつけられ、けれども控えめにしながら楽しみを一週間を過ごすのである。

29日は「ラビィサリ」「ハルマニア」の皆さん他、31日にはサックスの梅津和時さん多田葉子さん、3日には「さすらい姉妹」の皆さんと、新宿ではお馴染の方々による音楽祭や演劇祭を行ったが、何と新宿によく似合った人々なのかという程の熱演をなさってくれた。文化芸芸という力も、その地に相応しくなければ、どんなに名声があろうが、どんなに芸として優れているとも掃き捨てられる。一過性なものが渦巻いている街だからこそ、継続して来てくれる人々には心からの拍手が送れる。企画を毎年担当してくれている恩田氏もこの街のツボを知っている訳である。

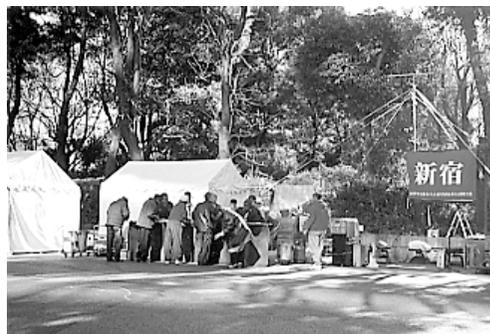
何もでしゃばらず、自然体で、だけれども媚びるだ

けではなく芯はもち、という路上特有の難しさというものを、私たちは年々マスターしている。マスターというよりはただ染められてしまっているのかも知れないが…。

炊き出しは一回の食数が9百から千食。それだけの仲間が毎晩中央公園の狭いポケットパーク広場に集まり、そこに大きなテントが三張り、毛布や物資は山積み、医療テントでは医師や看護婦が常駐。その様相はさながら難民テントのようだが、新宿の片隅の公園は年末年始は人通りは少ない。特段社会的に注目もされない行事が毎年のようにとりおこなわれている。地域の方の中には「区役所がやっている」と勘違いをしている方もいるよう整然と、何のもめ事もシュプレヒコールもなく、流れて行く時間。期間中は名前も告げずに衣類や野菜を差し入れて下さる方も多く、何か草の根的にこの地の年中行事になってしまっている風でもある新宿の越年闘争。

この事に慣れてしまう社会はどこか間違っているけれども、この取り組みが必要とされている間は、この取り組みの中から明日を見渡さなければ意味がない。この闘争はたたかわない社会を求めながらも闘わざるを得ない、けれどもその闘いを肯定しこの闘いを基盤としながら明日へと羽ばたいていかねばならない、そういう世にも稀なたかいだからである。

まあ、いずれにしても御支援ありがとうございました。



のんびり、しっかり、かつよく、越年は仲間のオアシス

越冬医療班 活動報告



稲葉剛

新宿連絡会医療班では、通常、月一回、第二日曜日の中央公園での炊き出しに合わせて医療相談会を開催しています。医療相談会には医師（歯科医師を含む）、看護婦、鍼灸師といった医療従事者が参加し、毎回、20～30人の仲間が相談に訪れています。（かぜ薬など薬だけを渡す人を会わせると100人を越すこともある）また昨年6月からは、約200人の仲間が暮らす都立戸山公園でも訪問医療相談プロジェクトを開始し、毎月第二日曜日の午前中にテントを訪問しながらの健康チェックと医師による机出し相談会を組み合わせた活動を行なっています。

福祉事務所の窓口が閉鎖する越年期を迎えるにあたり、医療班では何よりもまず「重症の仲間を年末まで路上に放置しない」ことを心がけました。定例の第二日曜日の医療相談会に加え、越年前最後の日曜となる12月23日にも医療相談会を行い、福祉行動に9人の仲間をつなげたほか、かぜが流行していた11月以降は医療相談会のない日曜日にも看護婦が炊き出しに来るなどしてかぜ薬の配布を行い、かぜの重症化を防ぐための活動を行なってきました。

そうした活動が実を結んだと自画自賛してよいのか、それともただ運が良かったのかはわかりませんが、今年の越年期の医療テントは、非常に「平和」な状態で年を越すことができました。例年ならば、パトロール班によって発見された重症の患者が次々と医療テントに運び込まれ、日を追うごとに「野戦病院」的な雰囲気になっていくのですが、今回、6泊7日の間にテントで宿泊した仲間はたったの二人。しかも一人は「四谷おにぎり仲間」（四谷、東京駅周辺などでおにぎりを配っているボランティアグループ）の依頼で宿泊することになった日比谷公園の仲間（全身衰弱など）であり、もう一人の仲間（足の化膿）も3日に一泊しただけでした。

ただ、それは医療班が越年期間中、暇にしていたという意味ではありません。30日と3日には複数の医師

が参加しての医療相談会を行いました。医療相談会を設定していなかった日にも多くの仲間が炊き出しの後、医療テントを訪れ、事実上の医療相談会が連日行われました。パトロール班の広報活動の結果、「具合が悪ければ医療テントに行くよう」ということが新宿全域の仲間に広く知れ渡り、健康に関する悩みを抱えてテントを訪れる仲間の数は例年より多かったと思われます。その意味で、医療テントは期間限定ながら「仲間の医療相談所」としての機能を果たすことができたのではないかと考えています。

越年期間の救急入院は4人。うち2人は結核。胃潰瘍と皮膚疾患が一人ずつでした。4日には、医療テントで医師に紹介状を書いてもらった仲間を中心に25人の仲間が福祉行動に参加し、希望者全員が医療機関受診を果たしたほか、3人が生活保護適用でドヤ・宿泊所入所、2人が女性施設入所、2人が法外施設に入所することができました。また期間中、穏やかな笑顔でテント内をなごませてくれた日比谷公園の仲間は、4日に千代田区福祉事務所を通して入院することができました。

越年期の医療班の活動は、医療従事者や学生を含む多くのボランティアの参加によって担われました。またドヤやアパートで暮らしている「元野宿」の仲間がテント設営や荷物整理等に汗を流してくれたり、新宿の仲間の間ですっかりなじみになったイギリス人画家のジェフ・リードさんがテント内で仲間の似顔絵を描いてくれたり、ということもありました。そしてテントには毎日のように、多くの支援者や近隣住民からの衣類カンパが寄せられました。

医療班としては今年もこうした多くの人たちと手をつなぎながら、「路上死」をなくしていく活動を続けていきたいと考えています。

*通年の中央公園での医療相談会や戸山公園での訪問医療相談プロジェクトに関する詳細な活動報告が、野宿者・人権資料センター発行『季刊Shelter-less』第11号（特集「野宿者の健康問題」）に掲載されています。1冊800円。送料実費でお送りしますので、ご希望の方は送付先と冊数を下記までお知らせください。

FAX:03-5367-5667

E-mail:inabatuyosi@mac.com
新宿連絡会医療班・稲葉あて



パトロール 班報告

星 将隆

去年から今年にかけておこなわれる新宿連絡会の越年越冬闘争も8回目に入り、路上の仲間にとっても一つのイベントとしても、よく知られるようになったのではないかと思います。越年の中央公園ポケットパークも年越しを過ごすための仲間であらばいいになりました。仲間と共に冬を越していくことも新宿においてはあたりまえのことになっています。

パトロール班も去年の秋ごろから2班体制（東と西）だったのをあらためて、3班体制（北を含む）にしました。野宿をしていた仲間が亡くなったのが、きっかけです。現在、日曜の炊き出しのあとのパトロールも3班体制を継続しておこなっています。越年越冬のパトロールの体制については最初、維持できるか不安だったのですが、やる気満々の仲間が合流したり3班の責任者もきめていたので、全体としてやりきれたんじゃないかと思います。パトロールについては、7時半からの3班のパトロールと11時からの深夜パトロール



越年一服風景

をおこないました。3班のパトロールは12月29日から翌年の1月3日まで連続しておこない、深夜パトロールは12月30日、1月1日、2日とおこないました。例年の越年のパトロールにくらべると重症の仲間や衰弱きった仲間には出会わなかったと思います。風邪をこじらせている仲間が多かったという



越年コンサートに聞き入る仲間

こともあって、市販の薬を配ったり、医療テントにきてもらいました。医療以外の面では3班のパトロールでイベントや催しを伝えたりしながら越年を共に過ごす雰囲気を作りました。呼びかけをおこないながら、楽しくやれたんじゃないでしょうか。ただ、パトロールをしていてもいろいろな問題がおこってきます。隊列がばらばらになったりすれば、迷子になっちゃう人も出てくし、これらの点を克服しようとルートを知っている仲間を後ろにつけたりしました。あとの会議の総括で、責任者にワッペンをつけたらいいのでは、などという意見もありましたが試行錯誤をくりかえしやっていく以外ないでしょう。こんな中でもパトロール班に参加した多くの仲間が、出会った仲間に喜んでもらったことは、一番の成果だったと思います。7時半からのパトロールが8時、11時からのパトロールが12時前とずれこむなかで、3班のパトロールから深夜のパトロールにも何人か仲間に参加してもらいました。もちろん志願制です。深夜のパトロールは西口地下広場から始まって、駅周辺、繁華街へとおこない最後にシャッターが閉まったあとの階段下を見て回り、流動している仲間には情報を伝え、翌日のポケットパークのイベントに呼びかけました。パトロールをして出会った仲間の数は年末から年明けにかけて、増える傾向にあります。

最後に3班パトロールの西口をまわった仲間の記録を掲示します。パトロールを一緒にまわった仲間たち！本当にお疲れ様でした。これから3月まで寒さはまだ続きます。共にガンバッテいきましょう。

越年闘争・炊き出し班 報告

本田庄次

毎年のことだが、年末年始は大量の米を山谷に炊きに行く。その量一日で約120キロ、一週間で800キロ以上になる。これだけの米を毎日炊くためには、山谷の越年闘争の拠点である城北福祉センター前まで行かねばならない。なぜならそこは、路上にかまどを据えて火を炊くことのできる、都内唯一の場所であるからだ。今回は12月29日から始まった新宿の越年闘争でも、毎日10名以上の仲間が新宿から電車で山谷へと行った。

かかる飯炊き活動の醍醐味の一つは、共同作業で体を動かして心身共にリフレッシュでき、とにかく楽しく充実感のあること。もう一つは、新しく越年の陣形に加わってきた仲間たちが多く参加し、顔触れに新鮮味のあることだ。とりわけ今回は、従来にないキャラクターを持った仲間が新たに参加してくれ、その陣形は越年後にも引き継がれている。

路上で時を過ごさねばならぬ理由は人それぞれ違う。越年期はその理由にあらゆるバリエーションが加わり、とんでもないところから越年闘争に参加してくる仲間もいる。今年の特徴は、20代をはじめとした若い仲間の参入だ。年越し直前に仕事を失い、一時的にはあれ公園

へと来ざるを得なかった仲間。年末に酒をたらふく飲み、財布を盗まれて中央公園で途方に暮れていたところ、向こうで炊き出しがあると声を掛けられて来た仲間。こうした仲間が率先して炊き出し活動を担い、厳しい年を越す大きな力となった。

こんな仲間の一人が、年を越し自分の生活に戻っていった。1月6日の日曜定例炊き出しを終え、「明日から定職の仕事に戻ります。来年はカンパを持って必ず来ます」と言い残して公園から職場に戻った仲間は、別れ際にこう言ってきた。「実は俺、山一にいたんです」。あの倒産騒ぎで解雇され、その後建築現場で荷揚げの仕事などに従事しながら、今は日払いの職を確保していると言う。何年か前までは背広を来て颯爽と仕事をしていたであろう労働者でも、ある日突然仕事を失い、めぐり巡って俺たちと一緒に釜の飯を食うことになる。この現実はある人にとって他人事ではない。

「また来年来ます」と言っても、実際顔を出すかどうかは分からない。しかし、飯炊き-炊き出し活動という一つの共同作業が、こうした仲間との出会いを作り、輪を広げていることは間違いがない。飯を配るというだけの事業ではない新宿連絡会の炊き出しがこういうところでも生きている。それは下層にある者同士をつなぐ、一つの共同事業なのである。

新宿連絡会は、越年後もこうした出会いとつながりを求めて毎週の炊き出しを継続している。

西口パトロール班の仲間が作った表

	2001(平)	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	AV.	1/6(13)
都庁	10	15	21	23	21	18	18	20							18	20
西口	85	74	118	118	120	103	120								103	120
小田急	7	11	15	13	8	10.8	6								10.8	6
ロフト	1	2	3	1	1	1.6	0								1.6	0
ハルク	6	9	18	16	16	12.8	14								12.8	14
成人病	20	5	18	14	16	14.6	19								14.6	19
おひさ橋	5	3	5	3	5	4.2	10								4.2	10
朝日生命	21	22	24	26	24	23.4	27								23.4	27
茶室新線	6	3	3	18	18	9.6	15								9.6	15
池袋本	10	10	14	14	12	12	12								12	12
サンエー	9	9	18	14	20	14	17								14	17
南口	6	14	16	9	16	12.2	5								12.2	5
計	101	103	155	150	157	110.0	145								110.0	145
堂(平)	(1,11)	(1,3)	(0,15)	(0,8)	(0,12)	(3,2)	(3,8)								(3,2)	(3,8)

越年期3班パトロールで出会った仲間の数

	12/29	12/30	12/31	1/1	1/2	1/3
都庁下	20	10	15	21	23	21
中央公園	32	42	103	45	57	
じゃぶじゃぶ池	64	49	47	47	51	27
西口	101	92	72	118	118	120
南口	6	9	14	16	9	16
北口	56	56	46	64	43	92
東口	63	63	60	88	74	88
地下広場	85	92	91	116	130	
総計	427	413		515	505	

3回目となる池袋の 越年闘争も無事終了

いげとも 逸田 哲典

●第3回池袋越年活動日程

- 12月28日 テント設営、荷物搬入
- 29日 テント管理、荷物搬入
- 30日 ちらし印刷
- 31日 紅白観賞
(南公園住民からテレビ借用、スタッフのみ)
- 1月1日 年始回り (山谷、新宿)
- 2日 大田寮面会、年始回り (渋谷)、お汁粉
- 3日 ちらし作成・印刷、医療相談会
- 4日 撤収作業、福祉行動、打ち上げ、テント借用延期
(7日まで)
- 5日 テント管理、荷物撤収
- 6日 テント管理
- 7日 テント撤収、荷物撤収



■炊き出し

今回は「飯炊き」からすべて池袋で行いました。月2回の定例炊き出しでの実績があることから。とはいえ、すべての調理を池袋だけでやることに対して異論もあり、最後まで結論が出なかった。時間的にも、労力的にも、当初の予想より余裕があったと思います。「飯炊き」の数は初日から一貫して5釜（1釜に発泡スチロールの容器×10杯）。

今年は料理長として、新宿から助っ人にきてもらいました。いまある食材を上手く利用して、おいしいメニューを作ってもらいました。必要最低限な食材（調味料など）以外を購入することなく、予算的にもとても助かりました。調理は料理長の到着後、料理長の指示にしたがって。

さらに、1月2日には、お正月メニューとして「お汁粉」をつくり、大盛況のうちに終わることができました（当初1月1日を予定したが、もつ煮込みの量が多いので翌日へと延期）。

12月30日	豚汁（みそ味）	96人
12月31日	卵とじ風野菜スープ	120人
1月1日	もつ煮込み	155人
1月2日	野菜スープ、みかん、お汁粉	160人、お汁粉 90人
1月3日	野菜スープ、レトルトカレー	154人

■夜回り

今回も3班（東口、西口、駅周辺）に別れて行なった。

山谷対策などで人数が減少すると思っていたのだが、今年は面接が厳しく、ほとんど利用できなかったようだ。大田寮の面接に行った人によれば、面接官に寝ていた場所周辺のこと、寝ていた部屋の配置など、事細かに厳しい質問がつづいたという。例年通りに「山谷で寝てた」だけでは通用しなくなった、とのこと。

今回は、「ゆっくりと話し込むこと」を夜回りの目標とした（あまり守られなかったようだが…）。毎日まわって顔を合わせることもあり、いろいろな話を聞くことができた。できれば、通常の夜回り時も、「話を聞く」ことをきちんとしていった方がいいのでは。

なかでも、駅周辺では「夜中の1～2時くらいと、明け方4時くらいに、寝ている人を蹴っ飛ばしてまわる奴がいる」という情報が。警察にも通報済みであり、複数の人が目撃しているとのこと。最終的に犯人判明。酒癖の悪いSさんだった。

また、東口に韓国人とみられる30代の女性がいる。他の誰にも話をしないが、小倉さんには話をしてくれるので、小倉さんに話を聞いてもらうことにするか。

	西口	東口	駅周辺	合計
12月30日	34	25	57*	116**
12月31日	36	48	80	164
1月1日	37	41	81	159
1月2日	40	26	95	171
1月3日	40	32	85	157

* 南通路を除く

**夜回り中止が勝手に決定されてしまい、コースを知っている人がいなかったため、データとしてはあまり正確ではない。

■医療相談

1月3日に新宿から、医師・看護婦・ボランティアの3人に来てもらって医療相談会を行なった。

大病をしている人は少なかったが、肺炎の疑いのある人、網膜剥離の疑いのある人がいた。翌日の福祉行動では、「病院が休みだから」という理由で週明けに持ち越されるケースがほとんど。そのなかで、肺炎の疑いのある人だけは、即日対応がなされたとのこと。

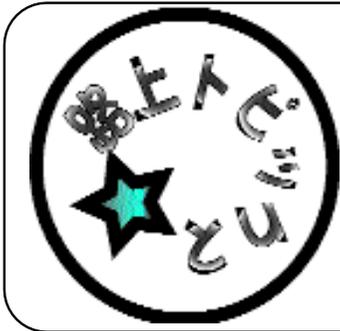
相談者数 17人
紹介状発行 5人

医療相談会のための聞き取りをするなかで、いろんな話を聞くことができた。

野宿生活をはじめて1～2日という60歳の男性。食事は手持ちのお金でなんとかかなっているようだが、そろそろ無くなりそうだという。もとは名古屋の方において、近頃、東京に出てきたとのこと。「働きたい」という強い希望を持っているのだが、どうにかならないだろうか。

67歳の男性。何かの事情で、年金の給与が来年の2月まで止められているとのこと。それまでの生活をどうにかしたいと言うのだが、生活保護の利用はできるのだろうか。本人は、年金があることなどから、生活保護適用の可能性はないものと考えているようだ。年齢も年齢であり、福祉事務所に相談に行くように勧めてはみたのだが。

また、胃演瘍の治療のため福祉を利用していた男性は、医者に「就職しろ」としつこく言われることに嫌気がさし、仕事が見つかってもないのに「職を見つけた」と言って、福祉を自分から切ってしまったとのこと。肝心の胃演瘍の治療は終わっていない。医者は「治った」と言ったらしいが、本人によれば、まだまだ胃が痛いとのこと。豊島福祉への再度の利用はできるのかどうか。



中央公園の悲劇

1月19日爆弾事件で仲間が手足が
吹き飛ばされ重体…

続いて24日には火災が発生…

私たちが新宿中央公園を炊き出し拠点に選んだのは98年2月、あの死傷者を4名も出した西口地下広場大火災の時からである。

新宿連絡会の歴史は94年の強制排除事件という「事件」を端に発した組織であるからであろうか、それ以降も幾多の「事件」「事故」というものを経験している。94年には「ホームレス連続殺人事件」があった。96年には再び大規模な「強制排除事件」があり、98年には前述した大きな「火災事故」。テントが1件焼けたとか、少年に石を投げられたとか、ちょっとした傷害事件があったとか、そんなものでは全然もはや驚かない程、私たちは路上の悲劇というのは新宿の地で見続けて来た。その都度私たちは運動を建て直し、事件や事故に巻き込まれた仲間を支え続け、はい上がるよう今日まで来た。

そこへ1・19の爆弾事件である。

確かに人的、空間的な被害というのは過去の事件、事故と比較すれば小さい方かも知れない。一人の仲間が手足を吹き飛ばされ重体になっただけとも言える。

が、その爆弾がたまたま周りに誰もいない時間帯に爆破しただけで、爆弾が仕掛けられたとされている時間帯には私たちのパトロールも行われており、またその夜には救世軍の炊き出し、次の日の朝には「横田チャペル」の炊き出しがありと、中央公園に仲間が多く集まる機会は幾らもあった。そんな場所で爆発しなかった事だけが幸いであるが、仲間一人の被害で済んだのはまさに「偶然」意外のなにものでもなく、仲間が盾になり多くの仲間を守り犠牲になってくれたとも言える。

かつて私たちが経験した「事故」や「事件」は因果関係というものが程度解っている。「事故」や「事件」を引き起こす側の人々がいて、「被害」を受ける人々がいて、そこに何らかのつながりがあり、何ら

かの理由がある。その理由が許せるとか、許せないとかの判断もできるし、「被害」を受けないようにするための防衛策というものも、完全ではないにせよ取ることも出来た。

が、今回はまさに不意打ちであり、私たちの問題でもなく、因果関係も何もかもが理解出来ない無差別テロである。

私たちが何故？という言葉を幾度発したとしても、その回答はどこにもない。闘病中の仲間を支え、快復を祈るだけしか出来ない。頭の中が空虚なのである。何がどうなっているのかさえ解らないのである。

もちろんこんな卑劣な犯罪はどんな理由があったとしても許されるものではない。これは一般的に言える。犯人に同等の苦しみを味わわせたいという気持ちも押さえる事は出来ない。が、私たちに報復する相手も見当たらず、怒りを空回りさせるしか出来ない。これは苦しい。かつて味わった事のない心情である。

そしてそこへ来て24日深夜のテント村火災である。事実として爆弾事件との連続性はなく、失火が原因とされており、しかも延焼したテントも含めて負傷者はいないのであるが、爆弾事件で騒然としている中央公園の夜に起こったこの火災事故はパンドラの箱を開けるよう「不安」を徒に増長させてしまった。



1/19爆弾事件直後の新宿中央公園

手足を吹き飛ばされた仲間、丸焼けになった村の残骸、想起されるのは悪夢ばかりである。ここも安住の地ではない事を中央公園の住民は私たちと共に再び静かに考えるのである。

新宿では貧しき民の「村」が無くなるという事を幾度も経験している。4号街路もインフォメ前も、過渡期としての「村」ならば永遠というものはない事は誰よりも理解しているつもりである。もちろん、今回その事も含め選択肢に入れざるを得ない状況になるかどうかは不明である。

私たちはホームレスが被害にあった事件なので抗議集会をしようとか、この事件を逆手に義援金を募ったり、排除反対のキャンペーンを張ろうなどという「左翼政治家」のような発想には立たない。被害にあった仲間の無事を祈り、そして、風向きをじっと見ながら沈黙をする。

無論私たちは行動するときは徹底的にする。私たちは掛け声やスローガン先行の団体とは違う。そして仲間に不確実な不安を与えない。行動をする時は事実に基づき颯爽と行動に移す。

が、私たちは今は事態の沈静化をさまざまな領域において行っている。憶測や危機感で動くべきではないという判断だからである。マスコミ報道の勇ましさに対して連絡会が何をしているのかが解らない方々が多いと思うが、私たちは私たちの拠点の場で起こった一連の事故にあたって、真っ先に現場に赴きさまざまな対処と情報収集を確実に行っている。もちろん基本線の運動や越冬後段の基礎活動を着実にやりながら。そして、新宿の仲間達は一連の騒動の中でも動揺を押さえながら上足立つ事なく確実に生き抜いている。

何が起ころうとも私たちはそれを克服しながら前へと歩んできた。今回もおそらくそうなることだろう。爆弾で手足をもがれた仲間も闘い、奇跡の生を勝ち取った。私たちは何があろうとも闘い続ける。過剰な心配は無用である。

* 意識不明だった仲間は23日奇跡的に意識が快復した。何事であろうとも諦めない彼の闘病の姿こそが新宿そのものである。

東村山では中学生による 仲間の虐殺事件が発生

マスコミ報道で明らかな通り、新宿で騒動が起これりホームレス問題に注目が集まる最中の25日夜、東村山市のゲートボール場で野宿をしていた鈴木邦彦さん(55歳)が中学生のグループによる集団暴行を受け亡くなるというショッキングな事件が発生しました。図書館で注意されたことに腹がたつての犯行との事です。

許し難い事件がまたもや発生した事に私達は腹の底からの怒りを禁じ得ません。無念にも殺された鈴木さんを心から追悼します。

事件の速報を受け三多摩地域で活動をしている「三多摩野宿者人権ネットワーク」は即座に現場に赴き、追悼行動を行なうと共に周辺の野宿者などからの聞き取り、また東村山市福祉事務所に対する行動を開始しています。

「三多摩ネット」や私達は東京都に三多摩地域の「路上生活者対策」を総合的に行なうよう要求してきました(23区部の対策は進んでいるものの、市部は放置されて来た)が、東京都や26市町会是一向に動かず野宿者問題を対岸の火事のように考えていました。こういう行政の姿勢もこの種の事件の遠因になっていると私達は考えます。私達は「三多摩ネット」の仲間と共にこの事件を考え、三多摩の地域社会へ向かっての前向きな行動を行なっていくつもりです。

民主党鳩山党首が 新宿・戸山公園を視察

1月29日、民主鳩山党首が戸山公園のテント村を視察し、野宿当事者や新宿連絡会との意見交換を行いました。「とにかく仕事がない」「法案を一日でも早く成立させてもらいたい」と切実な仲間の声に真剣に耳を傾け、近く代表質問で小泉首相に直接問いただすなど、政治の力で雇用問題や法案問題を解決する意欲を示してくれました。

一連の悲惨な事件が続く中での一抹の希望の日となりました。

活動報告

今年も元気に国会へ！
通常国会開始と同時に
第5次キャンペーンたたかう！



私達が求め続けて来た「ホームレス自立支援法」は先の臨時国会では、自民、公明の一部、また大阪市の反対により継続審議扱いとなりました。

与党三党は「ホームレス問題に関するワーキングチーム」なるものを作り法案問題についての協議を続けてきましたが、その調整も破綻。与党サイドの動きがない中で1月21日通常国会が始まりました。が、肝心の雇用対策やホームレス対策の問題はどこかに忘れられ、冒頭から外務省問題で大荒れの国会となっています。

この情勢に喝を入れ、野宿者を放置し続けている政治の責任を問い、法案の早期制定を実施させようと、新宿連絡会、池袋連絡会、三多摩ネット、野宿者人権資料センターの合同部隊は21日から連日衆議院第2議員会館前に陣取り「ホームレス自立支援法の制定を」と書かれた横断幕を高々とかけ、座り込み、チラシ配り、情宣活動など第5次キャンペーンを展開しました。

この国会冒頭への行動の締めとして25日は新宿、池袋の野宿の仲間100名、釜ヶ崎の代表団などを交えた大行動を実施。「ホームレス自立支援法を早期に制定しろ！」の声を国会に叩きつけました。また、議院ロビー活動も同時におこない、通常国会の場が正念場であり、何としても頑張ってもらいたいと、議員への要

請行動も力強く行ってきました。

失業率が5.6%とまともや戦後最悪を更新し続けている中、景気対策も雇用対策もホームレス対策も行なわない小泉政権への怒りは私達の仲間の中でも渦巻いています。新宿でも地方都市で失業し、東京に仕事を探しに来た仲間が年末を境に増え続けています。けれど東京の景気の状態も一段と悪く、例年だと新年10日後に動きだす建設日雇仕事なども激減している中で、多くの人々が野宿を余儀なくされています。

一日も早く政治の責任として法案を通し、ホームレス問題の社会的な解決のための第一歩に踏み込む事。私達はこれを求め、2月、3月と連続した全都、全国の仲間との国会行動を続けていく事を誓いあいました。



「ホームレス自立支援法案」の 議論の仕方について その2

笠井和明



「国会で排除を組み込んだ与党のホームレス特別立法が提出されようとしている」「排除と治安対策前提の法制化に反対しよう」なるフレーズが東京某所の地から全国に出回っている。

事情を知らない人がこのような文章に接したら、かくなる与党の「特別立法」が既に出来上がっていて、通常国会の冒頭にも提出される段になっているのかと勘違いをなさる事だろう。が、事実としてそのような事態にはまったく至っていない（与党ワーキングチームも意見に差がありすぎるため結論を出せずに流れている）。これが冷静かつ客観的な事実である。

事実ではないことをいかにも事実かのように組み立て、そして煽る。法案反対派の手法もここまで来たかと私などは実におぞましくなるのである。まあ、これは運動政治によくありがちな煽動の仕方なのであるが、こういう政治（排除があるぞあるぞと仲間に恐怖や不安を与え、自らの運動団体は排除とたたかっていると自己確認する傾向）を路上に持ち込むことは百害あって一利なしと断言しておこう。

しかも更にたちが悪いのが、煽動するはいいが自らは何も運動方針すら立てずに現状に胡座をかいている事である。もし、そういう動きが本当にあるのなら、そしてそれとたたかう必要があると判断するのなら、方針を持ち具体的に動き出すというのが運動団体の責務である。運動も作ろうともせずにピーター少年よろしく「騒いでいる」だけなら、本当に狼が来た時には誰からも信頼されないだろう。

まあ、ここまで書いても彼等にはほとんど解らない事なのであろう。

無論、新宿連絡会も強制排除には反対である。そのために実際にたたかって来た経緯もある。この立場は何ら変わる事はない。だからこそ、昨年末の与党内の議論の中で、大阪市が「公園などの適正化をし易いような法制度化を」などと時代錯誤的な横やりを入れ、

大阪市に利害関係を持つ国会議員が民主党案の取り扱いに反対した局面においては、国会前での大衆行動を行うと共に、その先鋒たる議員にも直撃し、また某党本部にも行動を起こしながら、強制排除という手法は間違っている事を行動として訴え続けて来た。もちろん大阪の仲間は大阪市への抗議も様々な形で取り組んでいる。

具体的にそういう時代錯誤的な動きを潰していく。私達はそうやって強制排除反対という立場を貫いているし、これからも貫くだろう。

私達は評論家的な「小泉だから強制排除するだろう」的な政治憶測で行動は起こさない。また、「政治家だからろくなものは作らないだろう」という井戸端会議的な発想には立たない。

政治経済の破綻から生じた野宿者の増加は、野宿当事者に日々困窮や危険を強い続け、また地域住民との軋轢も生み出している。これの調整に入るべき行政は自立支援の制度がないために右往左往している。ならば政治の責任として新たな制度を作り、この社会問題を解決すべき努力に傾注すべき、という当たり前の事を私達は主張し、また、そのために民主党案を支持し当事者の運動を進めているだけである。

民主党案を支持しないのならば、別の案を出せばよいじゃないかと私達は各方面で言い続けているのだが、ケチつけや反対はするものの未だにそのような動きはない。国の責任とか社会問題として考えましようなどと運動団体は口先では良い事は言うものの、内実はそのようなレベルでしかないのである。

政治批判だけで運動が成り立っていた冷戦時代そのままの運動をしている限りでは、仲間の信頼も、運動の未来もない事を自覚すべきであろう。各地で様々な活動をしているボランティアの方々の方がよほど先駆的である。

大田寮のっけから 混乱！ 特人厚にまかせていて は先が危ぶまれる新事業体系

緊急一時保護センター大田寮が12月に開始され、また、越冬対策施設の「さくら寮」「なぎさ寮」も12月から1月にかけて次々と開設されています。

東京都の新規事業たる大田寮には1月7日現在で254名（定員は300名）が23区から入所、新宿区は既に二順目でこれまで述べ49名を入所させています。他方、枠を新宿よりも多く持っている台東区、墨田区などでは、それぞれ45名、28名と当初枠を下回る入所者しか入寮させていません。新宿区では12月7日の入寮抽選会には119名が並び、1月7日は141名も並ぶという希望者が殺到する状態が続いていますが、台東区などは入所希望者が集まらずに手配師よろしく上野駅で狩り込みをしながら人数を埋めているという現状です。都区の新しい事業を野宿者へ周知徹底していない区が多い中でこのようなバラつきが生み出されているようです。

また中には60代後半や70代の仲間を生活保護を適用せずに大田寮に行かせている区などもあり、新事業の趣旨目的を理解せずにドヤ代わりに利用しようとする区なども現れ問題となっているようです。他方、特人厚が調整する悪しき平等主義（枠割り）により、懸念していた入所期間が1と月経っても次のステップたる自立支援センターへ移転できないという事態が早くも発生。「待機待ち」状態の仲間が新宿区だけで7名もいるという事態となっています。こうなると次の入寮者が入れず、事実1月7日の入寮は枠が18名（12月7日は28名）に削られました。これだけ希望者が殺到しているにもかかわらず、うまく23区の調整もつかず、かつ回転もしないようでは先が危ぶまれます。新宿連絡会としては緊急の改善の申し立てを新宿区にしているところです。他区の枠や調整枠が大量に空いているにもかかわらず、希望者に使わせないということは、入寮希望者を他区へたらい回しにする結果にしかありません。入寮希望者が少ない区は自ら周知徹底しないということなら、入寮希望者が多い区に枠を提供し、全体として大田寮を円滑に回すべきです。

新宿区では越冬施設でも希望者が殺到しています。12月20日141名、1月4日129名、7日141名、10日171名、18日144名と減るどころか寒くなるにつれ増え始めています。来年以降は越冬施設を廃止すると東京都や特人厚は考えているようですが、新たな事業体系がこのような混乱混迷状態の中では越冬施設は廃止するどころか必要性は逆に高まっていくものと考えます。

東京都の「路上生活者対策体系」は全国に先駆けたものであり私たちもその施策と努力は高く評価していますが23区の内部において未だ施策上の温度差があるようでは心もとない限りです。自立支援センターにせよ墨田寮は3月末にようやく開設の見込みがたっているとはいえ、渋谷区などは区長自らが「そんな施設は必要がない」と言明し一向に設置の目処がたっていないようでは何をかいわんやであります。今後の施設増設計画が順調に行くのかどうかも含め、23区の地域エゴに対する監視の目がことに必要だと考えます。

緊急一時保護センター大田寮利用実績速報
(02年1/7現在)

区名	入所数	退所数	在籍数	当初枠数
千代田区	12	0	12	12
中央区	12	0	12	11
港区	9	1	8	9
新宿区	49	19	30	28
文京区	9	2	7	7
台東区	45	7	38	43
墨田区	28	5	23	31
江東区	10	0	10	9
品川区	7	0	7	7
目黒区	5	0	5	5
大田区	13	3	10	11
世田谷区	3	1	2	7
渋谷区	16	2	14	16
中野区	9	1	8	6
杉並区	3	0	3	7
豊島区	11	0	11	11
北区	10	0	10	8
荒川区	10	4	6	10
板橋区	6	0	6	7
練馬区	4	0	4	6
足立区	10	1	9	9
葛飾区	10	2	8	8
江戸川区	14	3	11	11
合計	305	51	254	279



↑少年による虐殺事件が発生した東村山のゲードボール場

路上文芸総合雑誌

露宿

2002年も露宿は路上の声を拾い、路上の表現者を探し、表現の場を提供し続けます。本年もご愛読よろしくお願ひ致します。

新春16号好評
発売中！
p38 B5版 500円



購読申し込み方法

郵便振替用紙（00160-6-190947ろじゅく編集室）に定期購読もしくは継続購読とお書きになり、住所、氏名を明記の上送金して下さい（発行ごとに郵送します）。尚、郵便振替の他、切手での受け付けもしております。FAX、メールにても注文承り中。

路上文芸総合雑誌「露宿（ROJUKU）」（隔月刊）

〒170-0014 東京都豊島区池袋 1-14-5-13

TEL/FAX 03-3981-6746/090-3818-3450（笠井）

Eメール・rojuku@d9.dion.ne.jp

URL・http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/

郵便振替口座 00160-6-190947 加入者名「ろじゅく編集室」

↑戸山公園の仲間へ声をかける民主党鳩山党首

新宿連絡会会計報告 (2001年11月～12月期速報)

越年の取り組みへのカンパありがとうございました。

この他、たくさんの方々から毛布、衣類、ホカロン、お米などの物資カンパをいただきました。本当にありがとうございました。なお、越冬後段の日常活動への物資、現金カンパもまだまだ受け付けております。

収入)	支出)
①炊出し部門寄付 ￥370.925	①炊出し事業費 ￥188.634
②活動部門寄付 ￥59.125	②医療活動事業費 ￥22.097
③越冬部門寄付 ￥129.000	③パトロール関連費 ￥50.293
④緑フォーラム義援金 ￥2,000.000	④活動関連費 ￥102.734
⑤通信部門寄付 ￥28.325	⑤福祉面会関連費 ￥24.691
⑥池袋部門寄付 ￥5.000	⑥自立支援事業費 ￥14.000
⑦その他寄付 ￥657.125	⑦教宣活動関連費 ￥216.577
⑧事業収益 ￥4.800	⑧事務費 ￥181.974
	⑨返済金(裁判) ￥100.000
	⑩越冬事業費 ￥644.043
	⑪池袋関連事業費 ￥60.994
	⑫雑費 ￥6.530
	⑬次期繰越金 ￥1,641.733
合計) ￥3,254.300	合計) ￥3,254.300

越冬ボランティア募集中!

新宿炊出し (準備・片付け)

毎週日曜 午後6時より7時半

ところ 新宿中央公園

池袋炊出し (準備・片付け)

第2、第4土曜 午後4時より5時半

ところ 南池袋公園

パトロール (夜回り)

新宿駅周辺 毎日曜 午後7時半～

中央公園 毎金曜 午後2時～

戸山公園 毎水曜 午後6時～

池袋駅周辺 毎水曜 午後9時～

医療相談会

第2日曜 午後7時より8時半

ところ 新宿中央公園

*お問い合わせ先

090-3818-3450 (笠井) もしくは、

Shinjuku & Ikebukuro 連絡会 NEWS/VOL.27

2002年1月31日発行 (隔月刊) 定価100円

編集・発行 新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議 (新宿連絡会) & 池袋野宿者連絡会

〒111-0021 東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館 2F

電話・FAX 03-3876-7073 もしくは 090-3818-3450 (笠井)

カンパ金送付先・郵便振替口座 00170-1-723682 「新宿連絡会」

メール・shinjuku@tokyohomeless.com http://www.tokyohomeless.com

編集協力・ろじゅく編集室 東京都 豊島区池袋1-14-5-13 http://www.d9.dion.ne.jp/~rojuku/